

Saku Museum News

佐久市立近代美術館ニュース

No.5

2026.3

この一点〈館蔵品紹介〉

作者の神津港人(1889-1978)は、南佐久郡志賀村(現・佐久市)に生まれました。はじめは丸山晚霞に師事し、晚霞のアトリエのある小県郡瀬津村(現・東御市)まで、毎週片道20km以上かけて通っていました。その後、1907年、東京美術学校(現・東京藝術大学)西洋画科に入学し、黒田清輝、藤島武二、和田英作、岡田三郎助らに師事しました。1928年、齋藤素庵の勧誘によって、彫刻美術団体「構造社」に入り、絵画部を創設しました。そして1932年、ロサンゼルスオリンピックの芸術競技部門に、日本初めての芸術競技役員として参加しました。

郷里を愛した佐久市ゆかりの作家、神津港人の作品は、当館で23点収蔵しています。

その中の一つ、梅雨の井の頭公園を描いた本作は、港人が73歳の時の作品です。当時公園の近くに住まいがあり、たびたび訪れて絵を描いていました。

どんよりとした空から陽の光が差し込み、水面を照らしています。白鳥が列をなし、波紋を広げながらまっすぐと進んでいく光景は、静けさの中にも、ゆったりとした動きが表現されています。沈みがちな気持ちを振り払って、これから来る夏に向けて進んでいく活力を感じさせてくれるようです。

(滝沢彩乃)



神津港人 《五月雨》 1962

参考文献

- ・神津琢自『洋画家 神津港人の絵』、ほおずき書籍株式会社、2004
- ・神津恭介ほか『行先花ざかり 神津港人追想録』、非売品、1986
- ・八十二文化財団編『第12回企画展 神津港人展』、八十二文化財団、1993

企画展を振り返って Exhibition Review

田村文雄版画展—虚が実を支配する— 《2025年3月15日(土)～5月6日(火)》

田村文雄(1941-)は、小諸市出身の版画家です。長野県野沢北高等学校を卒業後、東京藝術大学および同大学院に学んだ田村は、リトグラフを中心に平版での表現の可能性を探り、様々な作品を制作しています。1970年には第2回フィレンツェ国際版画ビエンナーレ展で大賞を受賞するなど、その作品は海外でも高く評価されています。さらに、女子美術大学で教授を務めるなど、後進の育成にも力を注ぎました。

田村が主なモチーフとしているのは、女性像です。女性像を用いて、人間社会の虚実、矛盾、自己の内面と社会との繋がりといったテーマを、非日常的な物語性を持つ作品として表現しています。本展覧会では、1960年代後半から1990年代前半にかけて制作された40点の作品を展示し、その変遷を振り返りました。

会期中には、田村の教え子でもある女子美術大学教授の清水美三子氏によるスペシャルギャラリートークを実施しました。前日に田村に電話でインタビューをしたという清水氏は、それを基にしながら、さらに専門的な知見も加えて作品を紐解いてくださいました。田村の作風に大きな影響を与えた幼少期の春画との出会い、コラージュのように構築される画面、そして浮世絵の持っている平面性を活かした画面構成など、作品を見ながらそこに広がる不思議な世界を解明していきます。また、石版石もご持参いただき、参加者全員で触らせていただきました。実際に触れてみて、石版石の美しい色と肌とに〈人物〉を描くことの誘惑を感じてリトグラフを選択したという田村の心情にシンパシーを感じた方も多かったのではないのでしょうか。

女性像をモチーフとして、無表情の女性たちがパズルのように組み合わせられて構成される田村の作品には、まさに虚の世界が広がっています。しかし、その世界は単なる空想ではなく、田村の心が現実世界と触れ合ったときに生じる新たな物語であり、田村にとっての「現実」なのかも知れません。展覧会を鑑賞した方は、その世界観に迷い込み、そして実が虚に支配されてしまうような、そんな感覚に陥ったのではないのでしょうか。(前川知里)



展示風景

企画展を振り返って Exhibition Review

■ 「佐久平の美術展」の作家たち展 《2025年7月19日(土)～8月31日(日)》

「佐久平の美術展」は「佐久平に在住、在勤する者及び出身者で年齢16歳以上の者」(1974年当初)を対象に始めた美術作品の公募展です。2026年1月に第40回となることと、新佐久市誕生20周年を記念した事業としました。三つのセクションで構成し「佐久平の美術展」を振り返ることで、未来の佐久の美術文化を展望できるのではないかと考えました。

「展覧会を彩る審査員作品展・コレクションから」 これまで審査員を務めた32人中25人を収蔵品で紹介しました。歴代の審査員には、佐久にゆかりのある白鳥映雪、吉野純なども名を連ねていますが、当館収蔵作家にも審査を依頼してきました。これは当館収蔵品の性格を公募展においても表明しているということができ、「佐久平の美術展」と当館との親和性を再認識しました。なお、本展では紹介しませんでした美術評論家の平井亮一、竹内順一も審査員を務めてもらいました。

「佐久平の美術展を育んだ作家たちの眼差し」 「佐久平の美術展」に応募歴がある人々の作品展示で、個々の美術の感性を観ることができました。展示作品をホームページなどで募集した他、過去15年間25回展以降の出品者約400人に募集要項を送付しました。応募は85点に達し、作品のジャンルも日本画、水墨画、油彩画、鉛筆画、パステル画、水彩画、アクリル画、創作キルト、陶器、木彫、漆喰鍍絵、版画と多岐に亘りました。「佐久平の美術展」は日本画、洋画、彫刻の極めて限定的なジャンルで始まりましたが、時代が進むとともにさまざまな作品が出品されるようになりました。平成24年度に平面部門と立体造形部門の2部門制に整理したことで、立体造形部門に工芸作品が出品されるようになったことは大きな変化です。

「7人の美術家・創造の現在」 応募歴がある美術家から当館が選定を行い、佐久平の美術展実行委員会に諮り決定した7人に出品をお願いしました。小林冴子(油彩画)、高柳剛士(油彩画)・ハサミツキ(アクリル画)・須藤友丹(日本画)・白鳥純司(日本画)・齊藤智史(彫刻)・春原中道(工芸)の作品を一堂に展示したことで、制作意図の違いが明確に示されました。

1974年当初、地域には制作の傍ら絵画教室などで美術振興に貢献している方がいましたが、今回取り上げた美術家は他の職業につきながらも制作を生活の中心に位置付け、大きな公募展への出品や個展などで注目を集めています。活動内容の変化に40年の時の積み重ねを感じた展示となりました。(土屋 信)



齊藤智史はインスタレーション《シンセカイ》を出品、「鑑賞者が作品に影響を与える現象を期待している」といった。展示作家によるギャラリートークに46人の鑑賞者が集まり、齊藤が自作の前に話す狭い空間で、天井中央からさがっている木片が、いつの間にか静かに揺れていた。(2025/8/17)

■ 佐久地域ゆかりの作家 塩川高敏 《2025年9月13日(土)～11月3日(月・祝)》

塩川高敏(1948-2017)は1948年長野県小諸市に生まれました。幼くして佐久市に移り浅間町立岩村田小学校(現・佐久市)、佐久市立浅間中学校に通います。長野県上田高等学校を経て、1967年東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻へ入学し脇田和に学びました。その後、同大学大学院美術研究科で彼末宏に師事、1974年以降は母校の助手や美術予備校などの講師をしながら、国画会に所属して活動しました。2000年から尾道市立大学の設立に携わり美術学部の構想、設計などに尽力。同大学教授を経て2011年副学長に就任します。2016年に病で役職を離れますが、2017年に没する直前まで教育の現場に立ち続けました。



展示風景

確かなデッサン力と細密描写、優れた色彩感覚により「浮游」をテーマに現代社会に生きる人間の心象風景に通じる絵画世界を展開。本展では代表的な「浮游」シリーズをはじめ、小学生から晩年に至るまでの油彩画や関連資料等84点を展示しその軌跡を紹介しました。

郷里で初となる回顧展には塩川の古い友人をはじめ、親類、同級生、生徒などが数多く来館しました。作品を前に塩川の穏やかな人柄やユーモア、画家としての強いこだわりなどを懐かしそうに語り、会場は塩川への温かい想いであふれていました。本展を機に塩川を知った来館者からは完成度の高い作品の数々に驚く声もありました。

本展は企画から5年以上をかけてようやく実現しました。奇しくも最終日の11月3日は8年前に塩川の葬儀が行われた日だったそうです。どこか、ご縁のようなものがあつたのかもしれませんが。塩川は教育者として情熱をもって後進の育成に務め、生涯を通じて真摯に絵画世界と向き合い続けました。人が絵を描き続けることの意味を、作品を通して示したように思います。そして、彼が残した作品はふる里に多くの人々を再び結びつけてくれました。本展開催にあたり惜しみないご協力をいただいたご家族ならびに全ての関係者の方々に改めて心より御礼を申し上げます。

(由井はる奈)

佐久市
デジタルミュージアム
開設のお知らせ



この度、佐久市デジタルミュージアムを開設しました。
デジタルミュージアムでは、佐久市立近代美術館の収蔵作品を紹介しています。詳しくは下記をご覧ください。
<https://saku-digitalmuseum.jp/>

←佐久市立近代美術館の非公認応援キャラクター「いちじくくん」



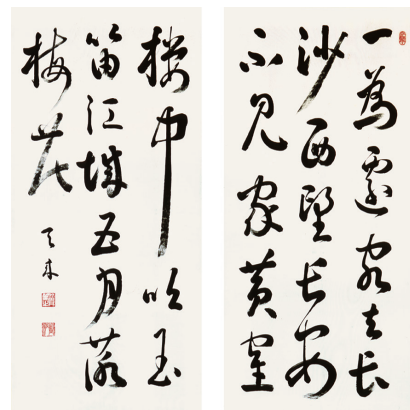
展覧会プレビュー Exhibition Preview

■ 書とはいかなる芸術かー比田井天来・南谷を起点としてー 《2026年9月12日(土)～11月3日(火)》

「書」と聞いたとき、いったいどのようなイメージを持たれるでしょうか。多くの人は、小学校や中学校の国語科書写の授業において筆で文字を書いたその瞬間を思い浮かべるかもしれません。しかし、それはあくまでも書の一側面に過ぎず、実は書の表現はもっとバラエティに富んでいます。

一般に書は文字を素材とした(造形)芸術であると定義されますが、今日「書」にカテゴライズされている作品は、これにとどまりません。(造形)芸術であるという点に異を唱える人はおそらくいないと思われませんが、「文字を素材とした」についてはいささか議論の余地があります。その代表的なジャンルのひとつに、前衛書が挙げられます。この前衛書は、文字から派生して発展させたものがある一方で、文字を起点としていないものもあります。先の「書は文字を素材とした(造形)芸術である」に照らし、前者のみが書であり後者は書としないのかというところではないでしょう。どちらも書の範疇に入るべきものといえます。では、書とはどのような芸術なのでしょう。

この命題については、今日に至るまで多くの人々によって様々な意見が述べられ、また議論されてきました。長野県北佐久郡片倉村(現・佐久市)出身の書家である比田井天来(1872-1939)、その息子で書家の比田井南谷(1912-1999)もそれぞれの掲げる理念をもとに多くの作品を世に生み出し、そしてその理念や作品は書道界に大きな影響を与えました。本展覧会では、天来や南谷の作品、そして南谷と同時代に活躍した前衛美術家たちの作品を通して、「書」の本質について再考します。



比田井天来《一為遷客去長…》1935-1937頃

本展覧会は、「第1章 今日の書ー上田桑鳩、手島右卿、金子鷗亭、桑原翠邦の果たした役割ー」、「第2章 比田井天来の書」、「第3章 書学院の果たした意義」、「第4章 比田井南谷の書」、「第5章 比田井南谷の生きた時代ー書と前衛美術の交わりー」という5つのセクションで構成します。第1章では、前衛書のパイオニアとなった桑鳩、少字数書の発展に寄与した右卿、近代詩文書を確立した鷗亭、古典を軸としながらも今日の書を追求した翠邦という、それぞれ特色ある業績を遺した天来の四大弟子の作品と彼らの書に対する考えを紹介し、今日の多様な書表現を確認します。第2章では、天来が上京する以前から晩年に至るまでの作品を展示し、古法(俯仰法)の発見や用いる筆が変化したことによる書風の変遷を辿ります。第3章では、天来や南谷、そして天来の弟子たちの学書を支え、また海外にも影響を与えた書学院に伝わる碑法帖と、天来と南谷の臨書を紹介します。第4章では、南谷の制作した前衛書の作品と文字を書いた作品を併せて展示し、その幅広い制作活動を紹介するとともに、南谷の考える「書」の本質に迫ります。第5章では、南谷と同時代に活躍し、書の影響を少なからず受けた前衛美術家の作品を紹介し、「書」という芸術の特性について再考します。

一書とはいかなる芸術か

今日に至るまで明確な結論が出ないこの問いを、天来や南谷を起点として、改めて問いかけます。

(前川知里)

館蔵品修復プロジェクト

■ 美術資料調査レポート

当館では、2033年の開館50周年に向けて、「油井コレクション」の日本画作品を中心に、作品の状態調査および修理を計画的に実施しています。2022年度より、株式会社絵画保存研究所の方に美術資料のコンディション調査に来ていただいております。今年度も2025年6月25日、26日の2日間にわたって計6点の美術資料の調査を実施しました。また、今年度は株式会社得水軒の方にも来ていただき、画面の状態とともに表具についても確認し、修理方針も含めた具体的な調査を行いました。

調査では、ライトを当てて細部まで画面の状態を確認、併せて表具の状態も調査し、カルテに書き込んでいきます。また、額装作品の場合は額から取り外して直張りか袋張りかを確認し、その上で具体的な修理方針を考えていきます。同時に美術資料に使用されている素材も確認し、画面はもちろんのこと、パネルの素材や酸化による長期的なリスクの有無なども確認していきます。

屏風作品の中には、現在は絵の具層の亀裂や剥落などが生じておらずとも、屏風を閉じたときに上下はぴったりと合うのに中間は合わないといった作品があります。これは、屏風の枠が経年により歪んだのが原因だと考えられます。こうした作品は、今すぐに、というわけではありませんが、中長期的なリスクを視野に入れ、屏風の仕立て直しを検討して計画的な修理方針を考えていかなければなりません。一方、すでに絵の具の剥落が生じ、さらには今にも剥落しそうな箇所がある美術資料もあり、こうした場合には早急な対応が必要です。

今この記事を手に取って読んでいる人のほとんどが、100年後には生きていないでしょう。しかし、美術資料は違います。人間よりも何百年、何千年も長生きする美術資料をより良い状態で未来へと繋いでいくのが我々美術館の使命です。そのためには、収蔵美術資料それぞれに対しての短期的、中期的、長期的なリスクを把握し、適切な時期にメンテナンスを施す必要があり、その計画を立てる上でも美術資料の状態を正確に把握することが不可欠なのです。

(前川知里)



美術資料の調査風景

館蔵品修復プロジェクト

令和8年度「日本画・中村貞以《待つ宵》を修復したい！」

煌びやかな衣装を身にまとった2人の舞妓が卓球をしているどこか不思議な作品。これは、中村貞以(1900-1982)によって描かれました。

中村は大阪府出身の日本画家です。幼少期に両手に大やけどを負い、指の自由を失ったため、絵筆を両手にはさんで描く「合掌執筆」を考案しました。1909年に浮世絵師の長谷川貞信に絵の手ほどきを受け、1919年に美人画家の北野恒富に入門、翌年には大阪美術展に初入選するなど、若くして頭角を現しました。

1923年に第9回日本美術院試作展で第1席を受賞すると、横山大観から不自由な手への励ましを受け、以後深い尊敬の念を抱き続けました。1932年には第19回再興院展で日本美術院賞を受賞、1936年に同人に推挙され、1965年の第50回再興院展に出品した《シャム猫と青衣の女》で翌年に第22回日本藝術院賞を受賞するなど、院展を中心に活躍しました。

本作品は、1933年の第20回再興院展出品作です。画面右の舞妓は青の落ち着いた色合いの裾引に伝統的な麻の葉文様を大きくあしらった帯を身に着け、どこか古典的な雰囲気を感じさせる一方、画面左の舞妓は赤を基調とした華やかな色合いの裾引に近代的な柄の帯を身に着けており、対照的に描かれています。そして、2人が興じているのは舞妓に似つかわしくない卓球です。画面の四方に黒い霧のようなものが掛かっており、それによってさらにこの場面の不思議さが際立っています。中村は、京の舞妓の世界を当時における唯一の夢の世界だとし、その夢の世界の住人に卓球という近代遊戯をさせることによって、当代風俗画として描き出したといえます。

制作から90年以上が経過した本作品は、胡粉が厚く塗られている画面右上方の葉や舞妓の衣装、卓球テーブル、ラケットなど、複数個所に剥落や亀裂が生じています。中村の代表作のひとつとして位置付けられている本作品を再び安全に展示できる状態にするには、修復する必要があります。(前川知里)



中村貞以《待つ宵》1933

プロムナード

美術を語る言葉

20世紀は既に過ぎ去り、21世紀もその四分の一が過ぎようとしています。佐久市立近代美術館に収蔵されている美術作品の大半は20世紀の間に制作されたもので、その作家や関係者も20世紀を生きた人たちです。では世界的に見たとき、20世紀を中心にその前後の世紀を生きた芸術家、思想家、学者、政治家などにどんな人々がいたのかと考え、紙面の関係で人数は限られますが、その生没年を拾ってみました。

油井一二氏(1909-1992)は言うまでもなく佐久市立近代美術館開設の基となったコレクションの寄贈者で佐久市出身の実業家(株式会社美術年鑑社初代社長)ですが、氏の生まれる1年前、構造人類学の祖とされるクロード・レヴィ=ストロース(1908-2009)がベルギーに生まれています。1949年、油井氏が戦後の再起を図ろうとしている頃、レヴィ=ストロースもアメリカ亡命からフランスに戻り、婚姻の規則を親族集団間の交換の体系とする、画期的な学位論文『親族の基本構造』を出版しています。

本ニュースの「この一点」で取り上げた画家 神津港人(1889-1978)は明治22年、佐久の生まれですが、この年オーストリアではアドルフ・ヒトラー(1889-1945)が生まれています。また同じ年、哲学者マルティン・ハイデガー(1889-1976)がドイツ南部のメスキルヒに生まれています。これを見ると、この時代に生きた芸術家や哲学者がいかに困難な時代を生きたかを想像してしまいます。ハイデガーの師であった、現象学の創始者エドムント・フッサール(1859-1938)も当時のオーストリア帝国にユダヤ系織物商の子として生まれたのでなおさらでした。そのフッサールの1年前、日本では女性石版画家の先駆者岡村政子(旧姓・山室)(1858-1936)が信州岩村田藩の江戸屋敷に生まれています。その1年前には、近代言語学の父と言われるフェルディナンド・ソシュール(1857-1913)がスイスに生まれ、さらにその1年前には精神分析学の創始者ジークムント・フロイト(1856-1939)がオーストリア帝国のユダヤ系毛織物商の息子として生まれています。これらの人々が世界史的には同世代人だったことになります。そして、岡村政子が日本初の公立美術学校としての工部美術学校で学んだ師、アントニオ・フォンタネージ(1818-1882)がイタリア北部で生まれた同じ年、当時のプロイセン王国にカール・マルクス(1818-1883)が生まれています。そしてフォンタネージの短い日本滞在(1876-1878)と前後して、マルクスの『資本論』が刊行されており、さらにこの二人は1年違いで没しています。また、神津港人の東京美術学校(現・東京藝術大学美術学部)での師のひとりであった黒田清輝(1866-1924)の生まれた年には、イコノロジー(図像解釈学)の端緒を開いたとされる美術史家アビ・ヴァールブルク(1866-1929)がドイツのハンブルクに生まれています。

先に取り上げた哲学者フッサールは最晩年の講演をまとめた『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』の中で「数学をも含んだ近代科学の解きたい謎は、まさしく主観性の謎に帰着する」という趣旨のことを述べていますが、このように見てくると、明治維新以来日本が近代化の手本としてきた西欧において、同時代的に、客観主義的実証科学の一面性に対し、また、非西欧世界への眼差しに対しての学問的批判が、主に人文科学の分野で起こってきえていたことがわかります。19世紀から20世紀をとらえて形作られてきた主観性の科学ともいえるべき人間学に基づいた議論が一般的な常識として有効性をもつには、まだまだ時間がかかるかと思われますが、こうした流れが示しているのは、私たちが美術を語る有効な言葉は、美術が語る言葉を私たちが理解する共通の術をもつところから始まるのだと、私には思われます。(館長 小山雅比古)

編集後記

Saku Museum News(佐久市立近代美術館ニュース)No.5は、当館のホームページでも、お読みいただけます。「美術館の1年を振り返り、これからの活動をお伝えすること」「学芸員の関心事を広く皆様にお伝えすること」を念頭におきながら編集しました。掲載した記事について、お気づきの点や感想、そのほか佐久に縁のある作家情報などを、書面等でお寄せくださいましたら幸いです。当館の調査研究、教育普及に役立ててまいります。

佐久市立近代美術館ニュース No.5

発行日 2026年3月27日

編集・発行 佐久市立近代美術館 油井一二記念館

〒385-0011 長野県佐久市猿久保 35-5 (駒場公園内)

TEL 0267-67-1055 FAX 0267-67-1068

<https://www.city.saku.nagano.jp/museum/>

デザイン・印刷 キクハラインク

